

狂騎士の英雄譚

牙刀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある少年は死んだ。

だが何者かの働きで新しい人生を送れる。

その体に狂った騎士を宿して。

目次

プロローグ	1
第一話	3

プロローグ

人生何があるか分らない。

目覚まし時計に起こされ、おふくろが作った朝飯を食べる、友達と何を話そうか考えながら家を出て。

こないいつも通りの日常が突然終わった。

俺上城 かみしろ 条野 じょうの は大型トラックと衝突し壁にぶつかり絶命した。

目を覚ました真つ白な場所にいた。

「目覚めましたね」

周りから女性の声が聞こえた。

「ここは、本来死ぬ筈のない人が訪れる場所です。訪れたに人一つ特典を与え転生する場所でもあります」

『成る程これが噂の転生系か本当にあるんだな』

そんな事を思っていたら

「特典は二つです。転生する世界を選べますが能力は勝手に選ばれます。もう一つが能力を自分で決める事が出来ますが転生する世界が勝手に選ばれますこの二つから選べます」

女神らしき者が出した特典でどちらを選ぶか少し考え決まった。

「自分で能力を決める方をお願いします」

「良いんですね？」

少し強めに言った。

「はい」

「分かりましたでは、能力を決めてください」

俺は話してる途中から考えていたのですぐ決まった。

「Fate／Zeroに出てくるバーサーカーランスロットをお願いします」

「分かりました。では少しお待ち下さい」

それから数秒だった。

「確認しました。では転生を開始します」

だんだん部屋が眩しくなっていくなか声が聞こえた。

「それでは、いい人生を送れるよう願っています」
その声が終わると同時に意識が途切れた。

人生何が起きるか分らない。

トラックと壁にサンドイッチにされ、そのまま転生して新しい人生を送れる。

本当に人生何が起きるか分らない。

転生した世界に魔力の概念がある事にその魔力を使う者ブレイザー伐刀者がいる事。

前世の記憶がほとんど無くなっていたが真つ白な部屋の会話、そしてこの能力についての記憶、自分の名前しか憶えていなかった。

俺は、産まれてそこから順調に成長しブレイザーになるため密かに能力の練習を重ねた。

〈十数年後〉

あれからひたすら能力を練習してきた。かなり悩んでデバイスを決めた。

俺は、ブレイザーになる為に《破軍学園》に入学した、

伐刀者ランク：A 攻撃力：A 防御力：C 魔力量：C 魔力

制御：F 身体能力：A 運：C

これが俺のステータスになる。

普通に強そうだがとあるわけで一年留年している。

しかし、そう悪い事ばかりではない。

他に最低ランクの為に講義が受けられなくて留年した仲間がいた。

彼は、入学当初からよく話していてすぐ仲良くなった。

その名は黒鉄くろがねいっき一輝。

理事長が立案した能力値選抜制より講義等に参加出来ず留年することになった。

だが、能力値選抜制はすぐに無くなった。

新理事長に代わり能力値選抜制が廃止しにしてトーナメント方式になり一輝も講義等に参加出来るようになった。

第一話

「ふあ〜」

春風が吹く中とある公園で欠伸をしている男が一人とその隣に屈伸運動などの準備運動をしている男が一人。

欠伸をしている男が上城 条野 準備運動をしている男が黒鉄

一輝。彼等は、破軍学園を通いながら毎日こうして集まり鍛錬に励んでいる。

「そろそろ始めようか、条野」

そう言つて準備運動をしていた一輝がこちらに振り向いた。

「おう」

そう言つて置いていた二本の木刀のうち一本を一輝に向かつて放り投げた。

一輝はその投げられた木刀を受け取り握り直しこちらを向いた。

俺も木刀を握り直し一輝を見た。

「そんじゃあ、行くぞ一輝！」

「来い！条野！」

お互いに打ち込んだ木刀のぶつかる音が朝の公園に響きわたった。

それから十数分後ついに決着がつき今回は条野の勝った。

「まさか左手に木の枝を隠し持っていたとはな」

そう最後の攻防で左手に木の枝を隠し持っており木の枝を弾かせてそこをつき勝利した。

「思いつきだったから上手く成功するとはな」

「思いつき」

「思いつき」

お互いにキョトンとしたのち、

「く、はははははははははは」

「ぶ、はははははははははははははは」

と、笑いが漏れて静かな公園に響きわたる。

「あ、はははそう言えば今日から新学期だから遅刻には気をつけろよ」
そう言つて一輝は立ち上がり木刀を布に包んで肩にかけた

「そう言えばそうだったか？これから新学期もよろしく頼むよ一輝」
俺も木刀を布に包んで手に持った。

「ああ、こつちもよろしく頼むよ条野」

お互い肩を並べて公園の出口に向かって歩き出した。

くく破軍学園寮にてくく

俺らは公園から今住んでいる寮まで戻ってきた。

「そんじゃ俺はもう少し上の階だからまた後でな一輝」

そう言つて上の階え向かった。

「うん、また後で条野」

一輝と別れた。

自分の部屋に人の気配を感じ静かに扉を開けてリビングの方へと
向かうと人影が見えて来た。

「誰だ！」

そこにいたのは、金色に輝く髪と漆黒に染まっている下着が体を更
に引き立てている。

その瞬間二人の時間が止まった。

止まった時間も束の間目の前にいる女性が手で体を隠すようにし
て、

「イ「ストップ！ストップ」」

急いで後ろを向き叫んだ。

「悪かった悪かった貴女の言いたい事もわかる、すまなかつた。貴女
が言いたい事も分かるけどここはお相方で俺も脱ぐから！」

そう言つて上着を脱ぎ捨てた。

顔が真っ赤になった女性はそのまま後ろに倒れた。

「だ、大丈夫か！」

近付いてみると、

「気を失ってるだけか」

体を持ち上げソファに乗せ布をかけた。

「改めて顔を見るとどこかで見たことが・・・」

記憶の中を探っていたら玄関のチャイムが鳴り響いた。

扉を開けるとそこにいたのは破軍学園の理事長、さつきまで一緒にいた黒鉄一輝と最後は、真っ赤に燃えたような真紅色の髪を持つ女性が俺を見て様々な反応示した。

理事長は、頭を抱えて「お前もか・・・」と、

一輝は、苦笑いしながら「ははは・・・」と、

赤髪の女性は、髪と同じ顔を真っ赤にしてこちらを見ている。

俺達は気絶した彼女が目覚めるまで待ち理事長が金色の髪の女性を落ち着かせ破軍学園の理事長室に連れて行かれた。